

アスペクトの獲得：
愛媛方言から言語（獲得）理論へ

村杉恵子 富士千里

『アカデミア』文学・語学編
第82号 抜刷 2007年6月
南山大学
名古屋市昭和区山里町18

ACADEMIA Literature and Language (82)
June 2007 Offprint
NANZAN UNIVERSITY
18 Yamazato-cho, Showa-ku, Nagoya, Japan

アスペクトの獲得：
愛媛方言から言語（獲得）理論へ

村杉恵子 富士千里

Abstract

This paper deals with the issues related to the first language acquisition of tense and aspect morphology in Japanese, based on the syntactic analysis of Aono (2006) on *-te iru*, *-toru*, and *-yoru* and the corpus analysis of a Setouchi-dialect-speaking child, Sumihare (Noji, 1973-7) from 1; 07 to 4; 11. In this dialect, the special aspectual forms are used instead of *-te iru*: *-Toru* expresses the perfective and progressive meaning, while *-yoru* expresses only the progressive meaning. According to Aono (2006), the two interpretations, progressive and perfective, arise due to the tense feature of *-te*. When *-te* has the non-past tense ([-tense]), the *-te iru (-toru)* sentence is derived by A-movement (raising) and has the progressive interpretation. On the other hand, when *-te* has the past tense ([+tense]), the *-te iru (-toru)* sentence has the control structure, and has the perfective interpretation. We report that two types of *-toru* sentences, progressive (which involves A-movement) and perfective (which does not involve A-movement), are acquired in the same age at around 2; 2 to 2; 3, followed by *-yoru* sentences.

Our findings have two implications for the acquisition theory. First, our analysis supports Murasugi and Hashimoto's (2004) proposal: those acquired late are not functional categories (such as *v* and T) per se, but their morphophonological realizations, contra the small clause hypothesis (Radford, 1990). Second, the fact that both progressive and perfective *-te iru (-toru)* are acquired at the same time is not expected under the A-chain Maturation Hypothesis (Borer and Wexler, 1987), given that the progressive construction involves raising while the result state construction involves control (Aono 2006).

1. はじめに

本稿は、アスペクトを示す「ている」文について、その統語的意味的特性と言語獲得について考察する。本稿では、野地（1973-1977）による「澄晴」の縦断的観察記録をもとに、愛媛方言で進行相、結果相を示す「よる」と「とる」のもつ統語的意味的特性の獲得される時期が2歳2ヶ月から2歳3ヶ月という早期であることを示し、さらに言語理論と言語獲得理論への意義について論ずる。

「ている」文（例：落ちている、走っている）については、金田一（1950）以降、先行する動詞の性質や文中に共起する副詞などによって、様々な解釈がなされると考えられてきた。たとえば、奥田（1985）は、「ている」には対立する二つの基本的意味解釈があることを提案している。その二つの解釈は、進行相、結果相と称される。

- (1) a. 彼は本を読んでいる。
b. 雪が積もっている。

一般に (1a) は進行相、(1b) は結果相の「ている」と称される。これらの違いを顕示的に示すものとして、「ている」を二つの異なる音声表示で表す方言がしばしば取り上げられる（金田一、1976；工藤、1995；Ogihara, 1998；Urushibara, 2004；青野、2006等）。日本語のいくつかの方言では、(2) に示すように、進行相の「ている」は「よる」、結果相の「ている」は「とる」で表される。(2a) は (1a) に、(2b) は (1b) にそれぞれ対応している。

- (2) a. 彼は本を読みよる。(進行相)
b. 雪が積もとる。(結果相)

日高（2002）は (3) 及び (4) のような調査により、「よる」と「とる」の使用される地域を明らかにしている（日高、2002）。

(3) 進行相の質問文：

桜の花が、今、散っている最中だとします。それを見て、「今花がチッテイル」と言いますか、「チリヨル」と言いますか、それとも別の言い方をしますか。

(4) 結果相の質問文：

前の晩に雨が降って桜の花がすっかり散ってしまったとします。地面に落ちている花びらを見て、「花がチッテイル」と言いますか、「チットル」と言いますか、それとも別の言い方をしますか。

日高（2002）は、いわゆる「共通語」の「(し) ている」に相当するアスペクト形式の全国分布を図1のように示している。図1は、「桜が散っている」を、進行相（動きの進行）の文脈で表現する場合と、結果相（結果の残存）の文脈で表現する場合のアスペクト形式の対立を示した総合図である（日高、2002）。

東条（1921）（東条、1995に再出版）の区分に従い、沢木（2002）では、「よる」と「とる」の形式は、瀬戸内方言、土佐方言、薩隈方言を除く九州方言及び東海東山方言（岐阜及び長野県南部）の一部の地域において、多く使用される傾向にあるとしている。このように一部の方言で、進行相と結果相のアスペクトが、音声的に異なる2つの表現で表されることから、「ている」文は2つの異なる意味解釈を持つ表現であると考えられてきた。

しかし、「ている」と「よる」「とる」を詳細に観察すると、「よる」と「とる」は常に「ている」と交替可能というわけではなく、「ている」は「よる」「とる」の代替表現とはいえない。例えば「よる」は、「ている」には許されない近未来の進行相も表わすことができる。

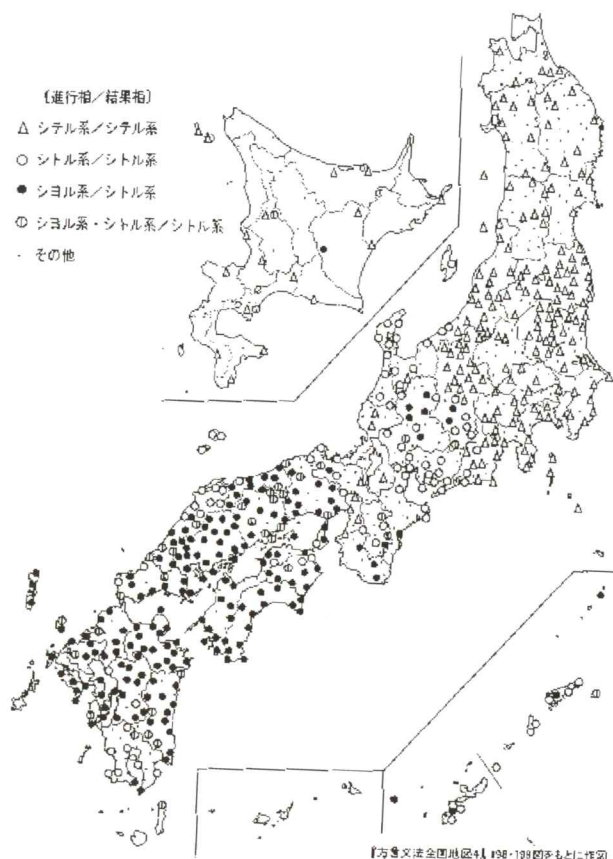


図1 「散っている」〔進行相/結果相〕の基本アスペクト表現の全国分布 (日高, 2002)

- (5) a. 飛行機が着きよる (着きつつある (進行相))
 b. 飛行機が着いとる (着いた状態にある (結果相))
 c. 飛行機が着いている (着いた状態にある (結果相))

東京方言においては、(5c)を進行相として解釈するのは不可能である。(5a)

と (5b) のパラダイムは英語の (6) のパラダイムと平行するといえる。

- (6) a. The plane is arriving.
 b. The plane has arrived.

また、「とる」は愛媛方言では、進行相、結果相いずれのアスペクトも表現できる (青野, 2006)。¹⁾

- (7) a. 葉っぱが落ちとる (葉っぱが落ちつつある (進行相))
 b. 葉っぱが落ちとる (葉っぱが落ちた状態にある (結果相))

これらの二つの「とる」文は、いわゆる「共通語」では「ている」文あるいは「てる」文として表れる。

- (8) a. 葉っぱが落ちて (い) る (葉っぱが落ちつつある (進行相))
 b. 葉っぱが落ちて (い) る (葉っぱが落ちた状態にある (結果相))

竹沢 (1991) および三原 (1997) 等では、この二つの「ている」に構造的相違があると分析している。青野 (2006) はこれらの先行研究の記述と一般化を検討し、また青野自らの方言である愛媛方言²⁾で二つの解釈が異なる音声形式であられる点 (例: 落ちとる, 走りよる) にも着目し, Saito and Hoshi (1998) で提案された LF 編入分析を採用することにより、結果相と進行相をあらわす二つの「ている」は同一の構造を持ち、かつ、進行相と

1) 「とる」に進行相と結果相の両方の解釈を許す方言と結果相解釈のみを許す方言があるようである。藤井友比呂氏 (p. c.) の判断によると、長崎方言では (7a) の進行相解釈はない。一方、愛媛方言では、青野 (2006) の判断によれば、「とる」には進行相・結果相両方の解釈が許される。本稿は青野 (2006) の判断に基づいて分析を進める。

2) 沢木 (2002) によれば、愛媛方言は瀬戸内方言の1つである。

結果相の意味を区別するのは「て」の素性であることを提案している。その分析によれば、「て」が [-tense] の素性をもつときには、繰り上げ (raising), 「て」が [+tense] の素性をもつときには、制御 (control) という二つの構造が導き出され、[+tense] の場合には結果相の解釈が、[-tense] の場合には進行相の解釈がそれぞれ可能となるとされる。³⁾

青野 (2006) と過去の先行研究が異なる点は、一見すると進行相解釈の「ている」文が繰り上げ構文、結果相解釈の「ている」文が制御構文をもつかのように見えるが、そうではないと提案する点にある。「いる」は任意に項をとることができる。「ている」文が結果相、進行相のいずれの解釈を得られるか否かについては、補文構造などの句構造上の相違によって区別されるのではなく、不定詞「て」がもつ時制の素性によって導きだされ、この時制の素性は構造に関与しない。(詳細は、青野 (2006) ならびに本稿 3 節を参照されたい。)

このように、「ている文」には、A 移動を含む繰り上げ構文と A 移動を含まない制御構文の二つの種類があり、その違いは、TP の主要部である T のもつ素性の違いによる分析が青野 (2006) によって提案されている。では、幼児は、いつどのように異なるアスペクトの言語表現を獲得するのだろうか。

「親のインプットの形式が幼児の言語獲得に影響する」とする考え方は根強い。しかし、親から幼児に与えられる文は、実際には、質的にも量的にも不十分・不統一であり、多くの非文や、言い間違い、途中で途切れた文などが含まれている。親は一定の順序で体系的に幼児に言語入力をするわけでもない。また、直接的な否定証拠に関する情報は言語獲得において働かない。幼児の発話が文法的に誤っていても親は文法を直さないし、たとえ親が直接的に文法を直したとしても、幼児は一定の年齢にならないと誤用を修正できない。それにもかかわらず、幼児は、脳に言語の障害がない限り、個人差の

3) 青野 (2006) は、進行相で制御構造のものはないが、結果相では、(35) に見るようなイディオムにおいて繰り上げ構造がみられるという分析を提示している。

ある自然環境の中で、体系的に整った言語教育を受けることもなく、短期間に、個人差のない等質の文法を獲得するのである。生成文法理論に基づく母語獲得研究においては、人間が創造的に文を作り上げていく文法能力 (言語獲得装置) は生得的なものであると考えられている。そしてその仮説は、生成文法理論研究史において理論的実証的研究によって裏付けられてきている。

幼児の発話の中には、一見両親の会話を真似た「模倣」であるかのように見える発話もないわけではない。(9) は、野地 (1973-1977) による SUMIHARE (澄晴) の観察記録からの例である。

(9) a. 母: アンタニワ コマルネ。

澄晴: アンタ ニ コマル ナイ。(2;2)

b. 父: ジョーダンジャ ナイヨ。

澄晴: ジョーダンジャ ナイ ネ。(2;4)

しかし、「ている」文、「とる」文、「よる」文など、方言によって多様に表現されるアスペクトに注目してみると、幼児が親から直接的な影響を受けることなく発話している例もある。

野地 (1973-1977) による澄晴の観察記録は、CHILDES データベース (MacWhinney, 2000) においても活用されているが、その澄晴と彼の両親は、地域区分上は、進行相は「よる」、結果相と進行相が「とる」で表れるとされる瀬戸内方言話者である。⁴⁾ 地域区分の上では同じ「瀬戸内方言話者」の親子ではあるものの、澄晴のアスペクト方言は、親とは異なる点が多い。澄晴の両親は進行相・結果相いずれもほとんどの例において「とる」ではなく

4) 野地によれば、父親は無アクセントの方言をもち、厳密には澄晴とは異なる方言であると観察している。方言とは厳密には地域で区分されるものではなく、個人により異なるものであるから、この親子の「方言」の違いはごく自然な現象であるといえる。

「てる」(あるいは「ている」)を用いている。一方、澄晴は(1歳11ヶ月からしばらくは親と同様に「てる」を用いるものの)2歳2ヶ月ごろを境に、親とは異なる形式でアスペクトを表現する。(10)の例が示すように、直前の談話において大人が「てる」を用いて話しかけても、澄晴はそれを模倣することなく「とる」を用いて返答する。

- (10) a. 母：ムシガ ナイテルンヨ。
澄晴：ドコ デ ナイトルン ネ？(2;4)
b. 澄晴：ムシ ガ ナイトル。
父：チンチロリン イッテ ナイテルネ。
澄晴：ドコ デ ナイトルン？(2;5)

(10a)は、母親が「鳴いてる」と表現しているにも関わらず、澄晴が直後に「鳴いとる」と「とる」という形式で発話している例である。(10b)では、父親が「鳴いてる」の形式を使い、澄晴は一貫して「鳴いとる」と「とる」を用いて発話している。

このように、幼児が、周囲の大人とは異なる形式で進行相や結果相をあらわす例は、他にも多く見られる。たとえば(11)を見てみよう。

- (11) 竹原のおばさん：ケイコ ナニ シテルノ？
澄晴：ケイコ ナニ シトル ノ ユータ。(2;3)

(11)は、近所に住むけいこちゃんの母親が、けいこちゃんに対して述べた「何してるの」という発話を聞いて、澄晴が繰り返す例であるが、この際、彼は「何しとるの」として反復している。

これとは逆に、澄晴が「何しとるね？」と「とる」を用いて、父親はそれに対して「つけてるのよ」と発話する例もある。(12)もまた、親が「てる」

子が「とる」を用いる例のひとつといえる。

- (12) 澄晴：オトーチャン ナニ シトルンネ。(2;4)
父：オノリオ ツケテルノヨ。

親と子が別々のアスペクト表現を用いる例は、「とる」だけではなく、「よる」についても観察される。(13)では、親が「するの」あるいは「しているの」という表現を進行相として用いるのに対し、同談話の中で幼児は「よる」文を進行相の文脈で正しく使っている。

- (13) 澄晴：トーチャン ドコ エ イキヨルン？(2;4)
父：コノ ミチヲ ユックリ サンポスルノヨ。
澄晴：ウン。トーチャン ドコ エ イキヨルン ネ？
トーチャン チャンポ ニ イコーヤ。(2;4)
父：コノ ミチヲ サンポシテ イルノヨ。

(13)は、澄晴が父親におぶられて外に出た時の発話である(野地, 1973-1977 (II) P. 466)。澄晴が一貫して「行きよる」と言っているのに対し、父親はまず「散歩する」と現在形で答え、次に「散歩している」と「ている」を用いて返答している。

これらの例は、澄晴が親からのインプットにはないアスペクト「とる」や「よる」表現を、自然に、少なくとも2歳3ヶ月の段階では正しく獲得していることを示すものである。

では、アスペクト表現は、厳密にはいつどのように獲得されるのだろうか。また、その獲得時期は、言語獲得の理論的研究の枠組みで、どのように位置づけられ、分析されるのか。

幼児は生得的に文法知識をもつものの、文法のすべてが早期に獲得され

るのではなく、一部は遅れて獲得されることを示す事実と仮説が提案されている。Radford (1990) は、英語の獲得段階について、20ヶ月までを前範疇化段階 (precategorical stage)、20ヶ月前後については語彙 (主題) 構造段階 (lexical stage)、24ヶ月前後については機能範疇発現段階 (functional stage) とし、20ヶ月前後までは、be動詞や動詞の一致 (T(ense)), 属格 (D(eterminer)), そして補文標識 (C(omplementizer)) が獲得されていない事実に基づき、機能範疇が語彙範疇よりも獲得が遅いとする仮説を提案している。はたして、「ている」文における TP の主要部「て」、あるいはその素性 ([+tense], [-tense]) もまた、獲得が遅いのであろうか。

また、A移動の獲得が遅れるとするA連鎖成熟仮説 (Borer and Wexler, 1987) は、英語において動詞的受動文の獲得が形容詞的受身文より遅れる獲得過程を論拠とし、A連鎖形成を支配する「原理」は初期状態において未成熟であるため、動詞的受動文の獲得には4年ほどの年月がかかり、それは、A連鎖を含まない形容詞的受身文の獲得よりも遅れて獲得されると提案するものである。

この成熟仮説に関しては、さまざまな言語からの検証が進められている。日本語からも、Sugisaki (1999)、Minai (2000) などのA連鎖成熟仮説を支持する研究結果が提示されている。A連鎖成熟仮説を日本語受動文に適用すると、いわゆる直接受動文と間接受動文のうち、A連鎖を含むとみなし得るのは直接受動文であるため、A連鎖の有無だけを問題にすれば、「間接受動文が早期に獲得され、直接受動文が遅く獲得される」という順序が予測される。

一方、A連鎖成熟仮説の予測に反して、英語については、Crain, Thornton and Murasugi (1987) により動詞的受動文が2歳で獲得されていることが実験的に示されている。また Eisenbeiss (1994) は、実験的研究により、A連鎖成熟仮説 (Borer and Wexler, 1987) の予測とは逆に、ドイツ語を母語とする幼児は、受動文についてエヴェント的解釈を過剰一般化する傾向があるこ

とを指摘する。セソト語やイヌイット語からは、直接受動文の獲得時期が非常に早く、3歳前にはなされるとする報告もある (Demuth, 1989; Allen and Crago, 1996 など)。日本語について、動詞的受動態が早期に獲得されると提案する論文としては小出 (1995)、またその後の研究として、従来構造の中にギャップがあると考えられてきた日本語の直接受動文や所有受動文の方が早く獲得される (すなわち、間接受動文のほうが直接受動文よりも獲得が遅い) と提案するものとして、Harada and Furuta (1999) や Sano (2000) などがある。この獲得順序について、斉木 (2002) は、Harada and Furuta (1999) が合理的な説明を与えていないとして、《関与・排除》の概念 (cf. Washio, 1993) を採用することにより、日本語受動文の獲得過程に説明を与え得ると提案している。

A連鎖成熟仮説が正しいとするならば、繰り上げ構文の構造を持つと考えられる「よる」文や「とる」文の獲得は、繰り上げ構造をもたない「とる」文よりも遅く獲得されることが予測される。

本稿は、機能範疇であるT(て)の投射と素性の獲得、ならびにA移動を含む繰り上げの関わる現象として「とる」「よる」「て(い)る」を含む述語文の獲得について、実証的理論的に考察するものである。ここでは、特に野地 (1973-1977) による縦断的観察記録、澄晴のデータをもとにアスペクトの発達過程について検討する。なお、CHILDESに活字化されたSUMIHAREのデータベースに誤記が多いことから、本稿では発話記録が出版されている野地の原典 (1973-1977) に立ち戻り、⁵⁾ 発話とそのコンテキストを詳細に検討し、瀬戸内方言におけるアスペクトの獲得について縦断的に分析する。また、本稿では、CHILDESのSUMIHAREのデータと野地自

5) 月齢のあらわし方はCHILDESのSUMIHAREデータに従う。なお、SUMIHAREデータベースの誤記は、データの一部が記載されていないといった頻度計算に影響のあるものから、項となる語の誤記(「鬼」を「ウニ」など)、両親の発話を澄晴の発話として、あるいはその逆に澄晴の発話を両親の発話として誤って表示するといった質的な研究に影響のあるものまで様々である。

身の著(1973-1977)にあるそれとを区別するため、野地(1973-1977)からのデータを「澄晴」の発話として表記する。

本研究は、機能範疇としてのT(ense)が、1歳11ヶ月という早期の時期に獲得されていることを指摘し、Radford(1990)の提案する小節仮説があてはまらない可能性を示唆する。(日本語の「て」命令形の早期獲得についてはOda(2001)を参照されたい。)しかし、一方で、幼児が大人とは異なる音声形式で動詞の時制を表現する段階があることを指摘し、これは、ひとつの音韻的語の中に複数の機能範疇があらわれる膠着語のような言語の獲得に固有の特徴であることを示唆する(Murasugi, 2007 a, b)。日本語の大人の文法において、Tの担う異なった素性は、それぞれ異なった音声表示により具現化される。本稿で示唆するところは、その具現化の形式(語あるいは音声形式)を獲得するには時間がかかるとする仮説である。さらに、進行相と結果相解釈をあらわす「て(い)る」「とる」については、2歳2ヶ月から2歳3ヶ月という早い段階で獲得されているとする分析に基づき、日本語のような膠着言語語においては、A連鎖成熟仮説を支持する根拠がみとめられないことを示唆する。一方、進行相のみをあらわす「よる」のアスペクト表現については、進行相の「とる」や結果相の「とる」よりも1ヶ月から2ヶ月遅れて獲得される事実も指摘し、その理由についても考察を加える。

2. アスペクトの意味と文法の獲得

2.1. 「ちゃった」と「てる」の発現

アスペクトの意味とその具現化を、幼児は、いつどのように獲得するのだろうか。「よる」文と「とる」文の獲得について分析する前に、完了を表すアスペクト表現「ちゃった」と進行相・結果相を表すアスペクト表現「てる」について概観しよう。

澄晴の言語表現の中に、明確にアスペクトが具現化されるものの一つとし

て、完了の「ちゃった」表現があげられる。澄晴はこのアスペクト表現を、2歳1ヶ月という早い段階で(大人と同様の完了の意味で)産出し始める。

(14) a. オチチャッタ (2;1)

b. タベチャッタ (2;4)

(14a)の「食べちゃった」(14b)の「落ちちゃった」はそれぞれ「食べる」、「落ちる」という動作が完了したことを表す。「ちゃった」は「(し)てあった」という意味を持つ表現であり、大人(の文法)においても日常的に使われる表現(正用)である。後述するように、過去形の「落ちた」「食べた」はそれぞれ1歳9ヶ月、1歳11ヶ月に、また現在形の「落ちる」「食べる(食べる)」はいずれも2歳0ヶ月に初出するようであり、アスペクト表現「ちゃった」はそれらよりも遅れて発現する。

進行相、結果相の意味を担う「てる」については、この「ちゃった」よりも2ヶ月早い時期の1歳11ヶ月に初出し、2歳1ヶ月以降頻繁に使われるようになる。(15)はその一例である。

(15) a. 父: オカーチャンニ オトーチャンモ アメ タベテルヨ
イッテゴラン。

澄晴: オカーチャン トーチャン アメ タベテルヨ。(1;11)

b. 澄晴: チューン イッテル ヨ。(2;0)

(15a)は、澄晴の発話に初めて「てる」が観察された例であろう。発話のコンテキストとしては、父親が澄晴に、母親に向かって「飴 食べてるよ」と言わせようとしているところである(野地, 1973-1977 (I) p. 342)。澄晴は父親の発話を真似ているが、「食べてる」は大人と同様の形式で音声化されているとは言えないことが野地自身によって記述されている。(15b)は、

澄晴が台所で揚げ物をしている母親の側に来て、その油の音（ちゅーん）を真似て言ったものである（野地, 1973-1977 (II) p.6）。

「ちゃった」や「てる」が自然発話に観察されるからといって、その時点でアスペクトに関する統語的意味的獲得がなされている、あるいは「てる」の「て」が「ている」の縮約形であり「て」が時制の素性をもつTPの主要部のTであると結論づけることはできない。2歳1ヶ月ごろにあらわれる「ちゃった」や1歳11ヶ月後半にあらわれる「てる」は、進行相や結果相をそれぞれ意味的には表すものの、文法的には大人と同じ文法構造をもたない可能性もある。すなわち、「ちゃった」「てる」を含む全体を動詞として（内部構造を分割せずに）ひとまとまりに捉えている可能性がある。

この可能性を支持する根拠として二点あげることができる。ひとつは、澄晴の動詞の獲得を詳細に検討すると、⁶⁾ 動詞の過去形と現在形が同一の形態であられる場合が多い点である。

澄晴の動詞の獲得について詳細に観察すると、過去形の形態で獲得された後に現在形があらわれる動詞のほうが、その逆の順序であられる場合よりも多い。このとき、(16c)のように主格の「が」があらわれる場合も少ない。

- (16) a. アメ オチタ。(1;9)
 b. サンバイ タベタ。(1;11)
 c. ワイタ ヨ オユ ガ。(1;11)
 d. ヨーヨー オキタ。(2;0)
 (17) a. オチル。 オチル。(2;0)

6) 動詞獲得については、Murasugi and Hashimoto (2004)、ならびにMurasugi, Hashimoto and Fuji (2007)が自動詞、他動詞、使役表現について、また矢野(2007)が可能表現について詳細な記述と分析を行っている。それらとの対照比較検討については別稿に委ねることにし、本稿では、アスペクトに注目する。

- b. ゴハン タベウ。(2;0)
 c. アカチャン オキル。(2;2)

2歳以前の澄晴の発話記録には、上記のように「落ちた」「食べた」「起きた」などの動詞については、（主格の助詞があらわれていても）過去形しか観察されない。さらに(23)で後述するように、2歳以前に「過去形」であられる動詞が別の意味を持つ場合が少なくない。このことは、言語獲得の初期段階には、機能範疇のT、ならびにその投射と格付与については獲得していても、文の時制に関する意味解釈が形態に反映されていない時期があることを示唆する。⁷⁾

二つ目は、否定形のあらわれ方にある。1歳11ヶ月から2歳1ヶ月頃までは、澄晴は、動詞全体に否定辞「ない」を付けている点である。

- (18) a. チンブン キタ ナイ ヨ。(1;11)
 b. 母：セッケンガ テニ ツイテルカラ アライナサイ。
 澄晴：ツイタ ナイ。(1;11)
 c. 父：シンブン トッタ？

7) 2歳2ヶ月ごろまでは、結果相や進行相、近未来の「ている」が、過去形の「た」としてあらわれる点(23)ならびに(24)を参照のこと)については後述する。これらの例は、アスペクトの「ている」の内部構造が2歳2ヶ月ごろに獲得されることを示すと考えられる。

機能範疇ならびに素性に関する知識を獲得していても、それらの形態的具現化において誤用が見られる言語獲得にみられる中間段階は、Murasugi and Hashimoto (2004)の大人の文法と幼児の言語獲得についての提案を支持するものである。Murasugi and Hashimoto (2004)ならびにMurasugi, Hashimoto and Fuji (2007)では、使役接辞の「-(s)ase」や（自動詞「aku」(開く) - 他動詞「akeru」(開ける)の交替などの)他動詞化の形態素「e」は、vpの主要部であるvであるとして提案し、言語獲得においては、その具現化に時間がかかるため、幼児の誤用「-(s)ase」形態素があらわれない使役文や、他動詞と自動詞の交替が見られるとする仮説を提案している。これは、Murasugi (2007a, b)においては、膠着語に特徴的な言語獲得の中間段階であると分析されている。

澄晴：トッタ ナイ。(2;1)

d. 母：オチルヨー。

澄晴：オチタ ナイ。(2;1)

(18a) は、澄晴が玄関に出て、自分(澄晴)がもう新聞を取ってしまっているため新聞がないことを、父に伝える発話である(野地, 1973-1977 (I) P. 343)。大人の文法では、「来てない」と発話されるところを、澄晴は「来たない」と動詞の過去形に「ない」をつけて発話している。(18b) は、澄晴が石鹸を持って遊んでいるのを、母親に注意され、「石鹸はついてない」と否定しようとして発話したものである(*Ibid.* P. 382)。母親は「付いてるから」と「てる」を用いて発話しているが、澄晴は「付いた」という動詞の過去形に「ない」をつけ、「付いたない」と発話している。これらの例は澄晴が動詞の過去形をひとつのまとまりと捉えている可能性があることを示唆している。(18c) や(18d) に示すように、2歳1ヶ月でも同じ誤用が見られる。(18c) は、澄晴が新聞を取りに玄関に行ったのに新聞を取らずに戻ってきて、父親に新聞を取ったかどうか聞かれ、「取っていない」と言うつもりで発話したものである(野地, 1973-1977 (II) P. 84) が、「取ったない」と過去形に「ない」をつけた形であらわされている。(18d) も澄晴が母親の発話に対して否定したものであるが、母親は「落ちるよ」と現在形であらわしているにも関わらず、澄晴は「落ちたない」と発話している。

これらの点から、2歳1ヶ月ごろに初出する「ちゃった」や「てる」は、意味こそ大人の用法から逸脱することなく完了をあらわすものの、動詞句全体がひとまとまりとして分析されている可能性は否めない。

縦断的観察記録によっても、この仮説は支持されるようである。完了「ちゃった」表現は、動詞過去形が獲得された後、現在形と前後してあらわれるパターンが多い。例えば「落ちる」という動詞については、1歳9ヶ月で「落ちた」という過去形が現れ、現在形の「落ちる」の発話が見られたのは初出

が2歳0ヶ月、頻繁に産出されるのは2歳2ヶ月から2歳3ヶ月頃である。一方「落ちちゃった」という完了の表現は2歳1ヶ月で初めて発話されている。他の動詞においても同様の獲得のパターンがみとめられる。

また、この仮説は、「ちゃった」と共起する動詞の生産性からも裏付けられる。2歳1ヶ月で「ちゃった」の初出がみられるが、2歳1ヶ月から2歳2ヶ月頃の「ちゃった」文では共起する動詞が限られている。具体的には(19a) や(19c) の「行っちゃった」が全「ちゃった」文に対して52.3%と半分以上を占め、以下(19b) の「くっついちゃった」(13.6%) や「付いちゃった」(6.8%)、「落ちちゃった」(6.8%) などの発話のみとめられる。(19) はその一例である。

(19) a. 父：ブランコニ イッタノ？

澄晴：ブランコ イッチャッタ。(2;1)

b. ババ ツイチャッタ。(2;1)

c. オーゼー オーゼー ノッテ ミンナ ノッテ イッチャッタ ヨ。(2;2)

(19a) は、その日の午前中に母親と遊園地のブランコに行った澄晴が、父親に「ブランコに行ったの？」と聞かれて、「行っちゃった」と「ちゃった」を用いて答えたものである(野地, 1973-1977 (II) P. 100)。(19b) は、澄晴が父と入浴に行く途中、足を滑らせて土(ばば)が付いたというコンテキストで、「付いちゃった」と発話したものである。(19c) は澄晴がおもちゃの電車で遊びながら発話したものである。⁸⁾

8) この時期にあらわれる「ちゃった」は(その統語的な内部構造を知っているのか否かは明確ではないものの)完了の意味解釈が可能な文脈でのみ用いられる点において興味深い。たとえ「落ちちゃった」(動詞句)全体がひとつの動詞的単位としてみなされている可能性があったとしても、意味としては大人の用法に逸脱することはない。

一方、2歳3ヶ月前後に発話される「ちゃった」は、様々な動詞に付いて生産的に発話される。

- (20) a. アガチャッタ。(2;3)
- b. ハイチャッタ。(2;3)
- c. キレチャッタ。(2;4)
- d. モエチャッタ。(2;4)

(20a-d) の例では、それぞれ「あがる」「入る」「切れる」「燃える」などといった動作の完了相が「ちゃった」表現で発話されている。

以上のような事実から、アスペクト（完了）の意味の「ちゃった」表現は、澄晴の場合、2歳1ヶ月という早期にあらわれ、その統語的内部構造を理解していると思われるのは、共起する動詞が多様化する2歳2ヶ月から2歳3ヶ月ごろであると考えられる。

興味深いことに、図2に示すように、「ちゃった」を伴う発話は2歳1ヶ月から2歳3ヶ月が最も多く、年齢が上がるにつれて減少する傾向にある。

「ちゃった」文が減少する2歳4ヶ月から5ヶ月ごろからは、(21) のような「～てしまった」の発話が増える。

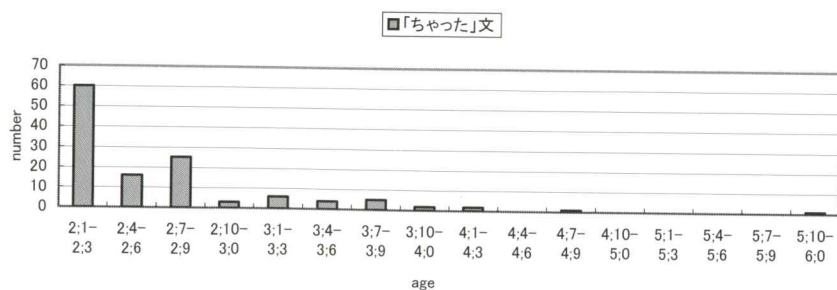


図2 「ちゃった」文の発話数

- (21) a. ウッカリ イレテ シマッタ。(2;4)
- b. スケテ シモータ? (2;5)
- c. オトーチャン ガ タベテ シモータ。(2;5)

「～てしまった」も「ちゃった」と同様に完了のアスペクトを表す。(21a)では「入れる」、(21b)では「抜ける」、(21c)では「食べる」にそれぞれ「～てしまった」を付けることにより、動作が完了したことを表している。(21b)と(21c)の「～てしも一た」は「～てしまった」の意として、近畿方言、瀬戸内方言(沢木, 2002)など関西以西の幾つかの方言で使われる表現である。2歳5ヶ月以降「ちゃった」が減少する頃から「～てしまった」などの軽動詞を伴う複合述語文の頻度が増えていくのは興味深い。⁹⁾

では、完了以外のアスペクト表現は、いつどのように獲得されるのだろうか。

先に述べたように、進行相や結果相といったアスペクトや時制(テンス)が、いつどのように獲得され、それが言語理論の中でどのような意味をもつのかを、コーパス分析のみから結論づけることは難しい。本節では、野地(1973-1977)により収集された澄晴データの中から、コンテキストが詳細に記述されている観察事実を厳密に調査することにより、「ている」文ならびにTPの主要部の「て」の素性と、派生に関わる移動の獲得について考察する。

(16)と(17)の例で示したように、澄晴の場合、動詞は単一の形式(多くの場合は過去形)で、その後、2歳を過ぎたころから二つ以上の形式(たとえば過去形と現在形)が具現化される場合が多い。文脈から幼児が現在と過去の意味を区別しているかのように解釈できる時期においても、時制(T)

9) (i) のような「～しだす」などの様々な表現を獲得するのも2歳5ヶ月前後である。

(i) オニーチャン ガ アメチャン トッタ カラ ナキダスター (2;4)

(i) は、おにーちゃん(澄晴自身)が弟「照樹」の飴を取ったために「照樹」が泣き始めたという意味である。

の音声的具現化として、動詞は単一の形態であられる。文の時制に関する意味解釈が形態に反映されない2歳以前頃の澄晴の産出する動詞については、過去形を用いて、過去も現在もあらず場合が多い。(16)と(17)を再掲する。

- (16) a. アメ オチタ。(1;9)
 b. サンバイ タベタ。(1;11)
 c. ワイタ ヨ オユ ガ。(1;11)
 d. ヨーヨー オキタ。(2;0)
- (17) a. オチル。 オチル。(2;0)
 b. ゴハン タベウ。(2;0)
 c. アカチャン オキル。(2;2)

一方、前節で言及したように、澄晴の発話に、親のインプットと同形の結果相「てる」と進行相「てる」が観察されるようになるのは、1歳11ヶ月後半である。初出から「てる」表現は大人と同様の正しい意味で頻繁に用いられる。(15)に加えて別の例を見てみよう。

- (22) a. アカチャン ミテル。(2;0) (進行)
 b. トーチャン ベンジョ ノ ト ガ ハズリテル ヨ。(2;0)
 (結果)
 c. セイジチャン アンアン イッテル。(2;1) (進行)
 d. コレ ヌレテナイ。(2;1) (結果)
 e. ブランコ チテル。(2;1) (進行)

意味的には(22b)においては、「戸が外れる」という動作が完結していることが文脈から明らかである。一方(22e)は、かかしがゆらゆらと揺れ

ているのを見て「ぶらんこ ちてる」と表現しているが(野地, 1973-1977 (II) p. 150), この文も、かかしがブランコをするように揺れる動作が発話時に、進行しているという意味を表すことが文脈から明らかである。意味的には「ちゃった」の場合と同様に、大人の用法から逸脱することはないようであるが、「てる」が「ている」の縮約形であり、その「て」の[+tense][-tense]の素性がどのような音声表現と結びついているかを知っているとすると根拠は薄い。(16), (17)ならびに(18)のような例が存在することから、この時期においてはTPの主要部T(「て」)の時制(の素性)については正しく理解しているとは結論しにくい。実際に、1歳11ヶ月後半に「てる」が、進行相、結果相の両方の意味を具現化する形であられ、「ている」が2歳1ヶ月に初出するものの、「てる」に比べてその数は非常に少ない。そしてこの時期には、「とる」文、「よる」文いづれもがあらわれていない。

また、2歳1ヶ月前後に、進行相や結果相の意味をもつと考えられる文があらわれてはいるが、それらが、過去形、あるいは現在形で音声化される場合も少なくない。

- (23) a. トーチャン ココ ゴミツイタ ヨ。(2;1)
 b. タイタイ ガ アガッタ。(2;1)
 c. 澄晴: セージチャン オコレタ。
 母: セージチャン? ダレニ?
 澄晴: トーチャン ニ。マダ ナイタ。(2;2)
 d. 澄晴: ナク。ナク。(2;1)
 父: ダレガ ナイテルノ?

(23a)は澄晴が寝ている父のそばに来て、父の睫の横(ココ)に、黒いもの(ゴミ)があるのを指し、父に向けて発話した文である(野地, 1973-1977 (II) p. 65)。文脈から大人の用法としては結果相の「付いてる (ている)」が適切

であると判断されるが、澄晴は「付いた」と過去形を用いている。同様に(23b)においても、発話のコンテクストとして「散歩の途中、鯉のぼり(タイタイ)があがっているのを見て、このように言った」(Ibid. P. 151)と記述されていることから、(23b)の澄晴の文は、結果相として「あがっている」であらわされるべき文と判断される。しかしながら、澄晴は「あがった」という過去形を用いている。(23c)については、澄晴(2歳1ヶ月)が隣の誠次君の泣いているのを聞いて「誠次君が(お父さんに)怒られた」の意味で「せーじちゃん、おこれた」(直接受身文)と発話し、母に「誰に?」と聞かれると、「とーちゃんに」と言う。そして、誠次くんがまだ泣いていると、澄晴は「まだ泣いた」と表現している(Ibid. P. 255, 太字ならびに下線は筆者による)。大人の文法では進行相「泣いている」あるいは「泣いている」とすべき文脈において、澄晴は過去形「泣いた」を使用している。(23d)は現在形の誤用の例と判断される。野地(Ibid. P. 131)によると、澄晴は、隣に住む誠次君が泣いているのを聞き、(23d)の文を発話している。父の発話からも明らかのように、ここでは、大人の文法では「泣いて(い)る」として進行相「ている」文があらわれるべき文脈である。しかしながら、澄晴は「泣く」という現在形を用いている。

このように「てる」を産出している(「とる」「よる」のあらわれない)段階にある幼児は、進行相、結果相を既得の動詞過去形あるいは現在形の形式を用いて産出することがある。このような事実は、幼児の産出と理解に差があることを示しているだろう。親の発話にあらわれる結果相、進行相の文を正しく理解している時期にも、幼児の産出においては、結果相や進行相については、言語形式「てる」(または「とる」「よる」)を用いて発話する場合もあれば、そうではない(現在形は過去形で代用される)場合もある。

では近未来相についてはどうだろうか。(24)は、近未来の相について、大人の用法では現在形であらわされるべき文脈で、澄晴が過去形を用いている例である。

(24) 母: キョウワ アメガ フルカラ イカン ネ。

澄晴: ギットン パッタン ヌレタ。(2;2)

(24)は、澄晴が外で遊ぼうと言うのを母が「雨が降るからいけない」と止めたのを聞いて、公園のシーソー(ぎっとんぼったん)のことを思いおこして言ったものである(Ibid. P. 169)。母親が「雨が降っているから」と「ている」を用いていないことから、雨が降るのは未来のことであると考えられる。従って、澄晴の発話も「濡れる」という、近未来をあらわす現在形であるべきであるが、澄晴は「濡れた」と過去形であらわしている。

(25)は、(24)とは逆に、同時期に、過去の事柄を現在形であらわしている例である。

(25) 父: コンデタ?

澄晴: コンデル。(2;2)

澄晴は、「混んでいた」という過去の事柄を言及するのに、「混んでる」と現在形であらわしている。(25)は、走っていったバスが混んでいたのかと父に聞かれたのに対して、澄晴が返答したものである(Ibid. P. 199)。父親の発話が過去形になっていることから、過去の事柄を示していることは明らかである。しかし、澄晴は、父親の「混んでた」という発話の直後に「混んでる」と現在形を用いて返答している。

以上により、2歳1ヶ月ごろにあらわれる「ちゃった」や1歳11ヶ月後半にあらわれる「てる」は、進行相や結果相をそれぞれ意味的にはあらわすものの、文法的には大人と同じ文法構造をもたない可能性が支持される。この時期、幼児は「ちゃった」「てる」を含む全体を動詞として(内部構造を分割せずに)ひとまとまりに捉えている可能性がある。「ちゃった」や「てる」のようなアスペクトに関する統語的意味的獲得がなされる時期は2歳2ヶ月

月から2歳3ヶ月頃であり、その段階までは、幼児の「てる」の「て」が「ている」の縮約形であり、「て」が独立して時制の素性をもつTPの主要部のTであるとみなしているとは考えにくい。

以上に論じたように、2歳2ヶ月ごろまでのアスペクト表現は、意味的には完了や進行相などを表すものが多いものの、「ちゃった」「てる」が統語構造的に動詞と異なる主要部として、独立して捉えられていない可能性が高く、これは、日本語のような膠着語の文法獲得初期の特徴を示す例であるといえよう (Murasugi, 2007a, b)。

2.2. 「てる」(進行相, 結果相) > 「とる」(進行相, 結果相) > 「よる」(進行相) の獲得

2.1.に見たように「てる」文は、自然発話においては早く観察されるものの、大人と同じアスペクト表現の統語的特性を担うかについては疑問が残るものである。

では、結果相と進行相の両方の解釈を許す「とる」文はどのように獲得されるのであろうか。「とる」の初出は2歳1ヶ月に観察される結果相の「くちやとる」である。2歳2ヶ月以降は進行相、結果相ともに産出量が増加する。

- (26) a. アカチャンガ チンチン ノットル。(2;2) (進行)
 b. オキトル ヨ。(2;2) (結果)
 c. ケエチャン ガ ナイトル。(2;3) (進行)
 d. ドコ デ ナットルン? (2;4) (進行)

「てる」文と「とる」文の動詞を比較すると、2歳2ヶ月から数ヶ月は同じ動詞について「てる」「とる」の両方が随意的に使用される例が少なくない。このような例は、「てる」と「とる」が同じ意味で用いられていることを示

唆する。

- (27) a. アカチャン ミトル ヨ。(2;2)
 b. アカチャン ガ ミテル ヨ。(2;2)
 c. アレ キョーコチャン ナイトル ネ。(2;3)
 d. シェイジチャン ナイテル ネ。(2;3)

(27a) と (27b) では「見る」、(27c) と (27d) では「泣く」という動詞が、それぞれ「とる」と「てる」の両方で使用されている。

また (28) のように、同じ談話の中で、進行相解釈の「してる」と「しとる」を続けて発話している例も見られた。

- (28) 澄晴: オトーチャン ナニ シテルン ネ? (2;6)
 父: プリントヨ。
 澄晴: プリント? ナニ チトル?

(28) では、父親に何をしているのか尋ねるのに、澄晴は、最初は「何してる」と、次に「何ちとる (なにしとる)」と発話している。

A連鎖成熟仮説に照らして再分析する際に重要な点は、A移動を含む進行相の獲得の早さである。「よる」文があらわれる前の、2歳2ヶ月から2歳3ヶ月の「てる」文や「とる」文は、本当にTPの主要部「て」が[-tense]の素性をもち、移動(A連鎖)が関与する例であるといえるのか。幼児の発話を丁寧に見ていくと、進行相の「てる(ている)」も「とる」も頻度が高いことがわかる。また、進行相の意味と具現化(ただし「とる」のみ)と結果相の「てる(ている)」および「とる」は、ちゃった(完了)アスペクトからわずかに遅れるものの、言語獲得段階としては2歳2ヶ月から2歳3ヶ月ごろという極めて早期に獲得されていると言える。下の例を見てみよう。

- (29) a. 父：オニーチャンガ ウタッテ イクデシヨ。
 澄晴：オニーチャン ガ ウタットル。(2;2)
 b. ナニ タベトルン？(2;2)

(29a) は、家の前を学生が2,3人歌を歌いながら通るのを見て父がこのように言ったのに続いて、澄晴が言った文である (Ibid. P. 207) ことから、この文が進行相の「とる」文であるといえよう。(29b) も、澄晴が、発話時点で、母が沢庵を食べつつある進行中の動作を見て発話したものである (Ibid. P. 352) ことから、この文が進行相の「とる」文、すなわち「て」が [-tense] をもつ文であるといえよう。

一方、「よる」の初出は2歳4ヶ月の「いきよる」にみとめられ、頻度こそ高くはないが、ほぼ毎月「よる」(進行相)の発話がみとめられる。

- (30) a. トーチャン ドコ エ イキヨルン？(2;4)
 b. ナニ チヨルン？(2;5)
 c. オ コケヨッタ。(2;7)

同じ進行相でも「とる」とは異なる「よる」という音声表示をもつ具現化は、進行相をあらわす「とる」よりも遅く獲得される。その時期の差はほぼ1ヶ月から2ヶ月程ある。また、「よる」があらわれはじめてもなお、「とる」に比べて「よる」の頻度はかなり少ないが、「よる」の発話が増える月には、進行相の「とる」が減少する傾向がある。

表1は、「ている」、「よる」、「とる」、「ちゃった」、さらに、動詞の獲得を時系列で示している。

表1 「ている」「よる」「とる」「ちゃった」文と動詞の獲得時期

	1;9	1;10	1;11	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6
動詞 (過去)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
動詞 (現在)	□	□	□	■	■	■	■	■	■	■
てる (進行)	□	□	□	■	■	■	■	■	■	■
てる (結果)	□	□	□	■	■	■	■	■	■	■
ている (進行)	□	□	□	□	□	■	■	■	■	■
ている (結果)	□	□	□	□	□	■	■	■	■	■
ちゃった	□	□	□	□	□	□	□	■	■	■
とる (進行)	□	□	□	□	■	■	■	■	■	■
とる (結果)	□	□	□	□	■	■	■	■	■	■
よる	□	□	□	□	□	□	□	■	■	■

■ は、発話が見られることを示し、■ は発話数が少ないことを示し、□ は、発話が見られないことを示す。

「よる」文は2歳4ヶ月に初出がみとめられるが、同時期に、澄晴は、近未来の意味をあらわすのに「とる」と「よる」の両方の形を用いている。

- (31) a. カーチャン ボク イマカラ ベベ チュクットル ヨ(2;4)
 b. イマ カラ ネ ポンガチ タベトル(2;4)
 c. トーチャン ドコ エ イキヨルン(2;4)

(31a) は母親が洋裁をするそばで、澄晴がものさしと鉛筆とを持って言った文である (野地, 1973-1977 (II) P. 449)。つまり、母親に自分 (澄晴) がこれから着物を作る (予定である) と言っているのである。この文は、大人の文法においては、現在形「作る」としてあらわされるべきところで「とる」が使用されていることを示している。(31b) の文は、澄晴がポン菓子を食べようとして、それを入れた器をミシンのふたの上に置き、自分 (澄晴) はいすの上に乗って発話した文である (Ibid. P. 464)。文脈から、この場合大

人の文法では「食べる」として表されるべきところであるが、「食べとる」が用いられている。一方、同時期に「よる」の「正用」も観察される。(31c)は、澄晴がお父さんに「これからどこに行く予定なのか」を尋ねるものであり、「よる」があらわれている。

2歳5ヶ月以降には、近未来を誤って「とる」としてあらわす例は現在の調査では見当たらず、(32)のような正用が見られる。

(32) マタ デキヨル ヨ。フタツ ト ミツ ヨツ デキヨル ヨ。
(2;5)

(32)は、澄晴がチューインガムを噛んでいる時、ガムがしゃもじのような形になったのを父に見せ、その後しばらくして発話した例である(野地, 1973-1977 (II) P.698)。これからまたしゃもじの形にするという意味をあらわす近未来相と解釈でき、澄晴は「できよる」と「よる」を用いて正しく発話している。

2歳4ヶ月での誤用を含む近未来の「とる」の出現は、「よる」文が2歳4ヶ月で獲得されることを裏付けるといえよう。先に述べたように、近未来相をあらわせるのは英語の *be-ing* と日本語の一部の方言にみられる。「よる」文であり、「て(い)る」文や「とる」文はそれをあらわすことができない。いわゆる「共通語」の日本語にはない近未来の意味と形式を獲得するとき、澄晴は「よる」が「とる」とは(進行相においては重なるものの)別の意味をもつことを知るのであろう。

以上が澄晴の縦断的観察事実をもとにした分析である。¹⁰⁾ 次節では「ている」文および「とる」文と「よる」文についての理論的分析を概観する。

3. アスペクト表現についての大人の文法

3.1. 「ている」と「とる」と「よる」の統語分析

「ている」文にみられる進行相及び結果相の意味解釈の違いはどのような統語的理由に起因するのか。これらが異なる統語構造を成しているためとする分析が竹沢(1991)や三原(1997)などによって提案されている。

三原(1997)は、進行相「ている」と結果相「ている」の間には、「いる」

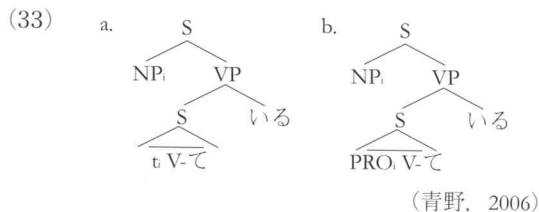
10) 表2は「とる」文、「よる」文の具体的な発話数を使役文、可能文、そして受身文の発話数と比較したものである(可能文のデータは矢野(2007)による)。

表2 「とる」文、「よる」文、可能文、使役文、受身文の獲得時期

	1;9	1;10	1;11	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6
動詞(過去)										
動詞(現在)										
てる(進行)										
てる(結果)										
ている(進行)										
ている(結果)										
ちゃった										
とる(進行)										
とる(結果)										
よる										
可能文										
語彙的使役文										
統語的使役文										
受身文										

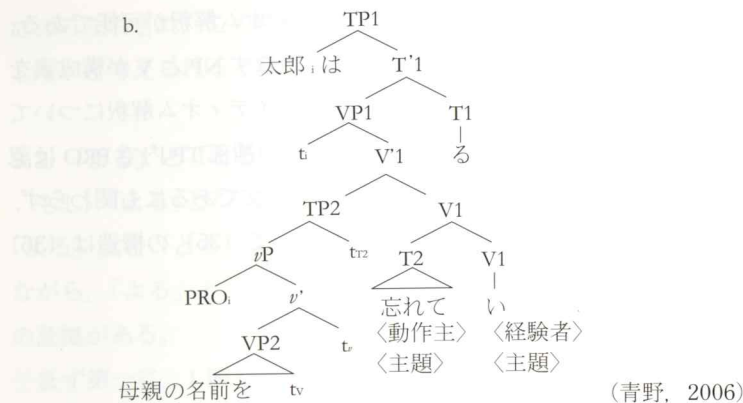
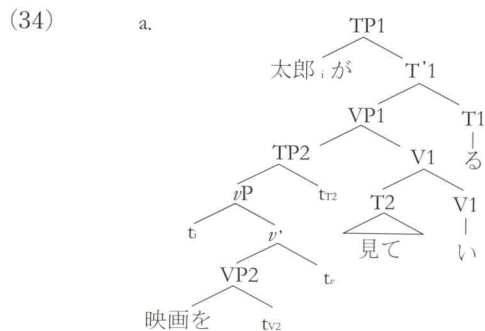
表1と表2を合わせて考えてみると、2歳2ヶ月前後に、「ている」「とる」「ちゃった」などのアスペクト表現や可能文、語彙使役文、受動文などの構文を獲得していることがわかる。これらを比較、統一的に分析することができるかについては次稿に譲る。

が外項を取るか取らないかという相違がある（この場合 θ 役割は経験者）と議論している。(33a) は進行相の場合である。この構造では「いる」が外項をとらない。一方、(33b) のように結果相の場合は「いる」が外項を取る。



三原 (1997) の分析は、進行相の「ている」文は繰り上げ構文、結果相の「ている」は制御構文であると言い換えることができる。

しかし、結果相の「いる」が必ず「経験者」の外項を取るという提案にはいくつかの問題がある。これらの問題について青野 (2006) は、意味と統語構造が必ずしも平行していない例について詳細に検討し、進行相と結果相の意味を区別するのは「て」の素性であることを提案している。つまり、「ている」が進行相と結果相どちらを表すのかに関わらず、「いる」は外項を取ること取らないことも可能であると提案する。(34) は「いる」が外項を取らない場合と取る場合のそれぞれの構造である。



(34a) では「いる」が外項をとらないため主語の「太郎」は「いる」の補部 TP 内より繰り上がっている。一方 (34b) では「いる」が経験者の外項をとるため、一般的にはこの外項が動詞「忘れ」の外項 PRO を制御する制御構文の構造となる。

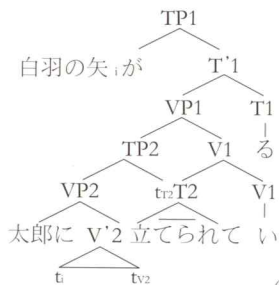
進行相解釈の「ている」文の「て」は過去をあらわさない。「て」([-tense, -finite]) は、格照合を行わないため（制御補文主語の格照合については Martin (2001) を参照されたい）、格照合が行われる主節主語位置まで NP が繰り上がる。一方、結果相の「て」([+tense, -finite]) は、空格を照合し、PRO を認可する。このため埋め込み文内の NP は、格照合が行われる主節主語位置まで NP が繰り上がることはないと分析される。

しかし、青野 (2006) では、いずれの「ている」文においても、PRO は現れないと提案している。例えば、(35) のようなイディオム解釈の文は「ている」が結果相解釈をとりうるが、「いる」が外項をとるとは考えられない、つまり、制御構文のような構造にはならないのである。

(35) 3年前白羽の矢が太郎に立てられている。

(35) は、「太郎が注目的となった」というイディオム解釈が可能である。イディオム構文においては、一般に、イディオムをなす NP と V が構成素を成さなければならず（日本語の複合述語文におけるイディオム解釈については Nishigauchi, 1993 を参照）、したがって、「いる」の補部 TP 内で PRO は認可されえない。つまり、(35) は結果相を表す「ている」文であるにも関わらず、繰り上げ構文の性質を持ち合わせており、したがって (35) の構造は (36) のように仮定される。

(36)



(青野, 2006)

この構造が正しいければ、結果相解釈の「ている」文においては、PRO が現れうるものと現れえないものがあるということになり、PRO は何によって認可されるのかという問題が残される。

この問題に対して、青野 (2006) では、Saito and Hoshi (1998) の LF 編入仮説を採用することにより、すべての「ている」文において、PRO は認可される必要がないことを示している。LF 編入仮説の下では、動詞はその投射内で θ 役割を付与する必要はなく、上位の V に編入することによりその θ 役割を付与することができる。このため、「いる」が外項をとってもとらなくとも、PRO を認可する必要はない。「ている」文が進行相、結果相のいずれの解釈を得られるかは構造によって区別されず、また、「いる」は意味に制限されることなく、自由に外項をとる。青野 (2006) はあくまでも、進行相と結果相のそれぞれの解釈は、不定詞「て」がもつ時制の素性によ

のみ左右され、この時制の素性は補文構造などの句構造そのものには関与しないと考えられると分析している。

3.2. 「よる」と「とる」の統語的特性

もし、「よる」と「とる」が「ている」の代替として用いられているとすれば、「よる」文と「とる」文も構造的には区別されていないことになる。しかしながら、「よる」と「とる」は統語的に異なるという可能性を示すいくつかの証拠がある。

まず第一に、1 節でも述べたように、「よる」は「ている」が表し得ない近未来を表すことができ、この点では、補部に VP を取る英語の進行相を表わす *be* 動詞に後続する動詞 + *ing* に似ている。表 3 は「よる」、「とる」、「ている」そして英語の (*be*) *-ing* における、進行相、結果相、近未来解釈の有無をまとめたものである。

表 3 「よる」「とる」「ている」(*be*) *-ing* の解釈 (青野, 2006)

	よる	とる	ている	(<i>be</i>) <i>-ing</i>
進行相	○	○	○	○
結果相	×	○	○	×
近接未来	○	×	×	○

第二に、「よる」と「とる」に先行する動詞語尾が異なる。「ている」と「とる」に先行する動詞の語尾は同一である。

(37) a. 「とる」

飛んどる、泣いとる、行っとる、咲いとる、買っとる、踊っとる、
読んどる

b. 「よる」

飛びよる, 泣きよる, 行きよる, 咲きよる, 買いよる, 踊りよる,
読みよる

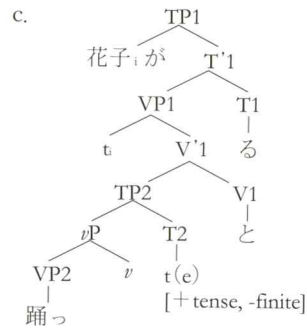
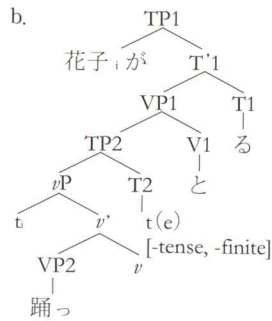
(37*) テ形

飛んで, 泣いて, 行って, 咲いて, 買って, 踊って, 読んで

(青野, 2006)

表3や(37)に示したような事実から, 進行相と結果相の「ている」文とは異なり, 「とる」と「よる」はそれぞれ異なる統語構造を持つことが予測される。「とる」文の構造を(38)に, 「よる」文の構造を(42)に示す。

(38) a. 花子が踊るとる



(青野, 2006)

(38)は「とる」文の構造である。(38b)は(38a)が進行相解釈となる構造であり,(38c)は結果相解釈となる構造である。どちらもPROは現れず,「いる」が外項をとるか否かだけが異なる点である。これは, 進行相, 結果相解釈の「ている」文と同様である。

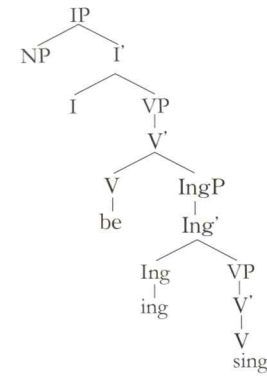
一方, 「よる」文はどうであろうか。英語の *be* に続く *-ing* と類似した意味

解釈を有することから, 英語の構造 (Lasnik, 2000) をみてみよう。

(39) a. Jim tried [_{IP} PRO to solve the problem]

b. Kim_i seems [_{IP} t_i to be the smartest]

(40)



(Lasnik, 2000)

(39)は英語の *to* 不定詞構文, (40)は (*be*) *-ing* 文である。*to* 不定詞構文においては主節の動詞が補部に IP をとるのに対し, (*be*) *-ing* 文では直接 VP (あるいは VP に付加されたアスペクト範疇) をとる。

さらに, 「よる」に先行する動詞の語尾変化に再度注目されたい。

(37b) 「よる」

飛びよる, 泣きよる, 行きよる, 咲きよる, 買いよる, 踊りよる,
読みよる

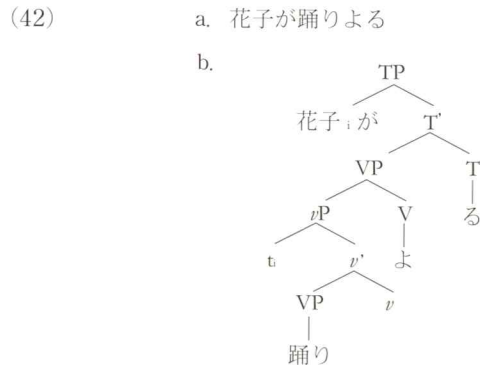
(41) 複合動詞

飛び続ける, 泣きわめく, 行き始める, 咲き続ける, 買い終わる,
踊り終わる

(青野, 2006)

(41) は VP が 2 重に投射されるとする複合動詞の例である。(37b) と比べて明白のように、下線部の動詞の形態が同じである。

英語の (be) -ing 文の構造と、この語尾変化の事実を踏まえて、青野 (2006) では「よる」は補部に IP ではなく VP をとる (42) のような構造を持つ可能性を示唆している。



(青野, 2006)

以上に示した (38) の「とる」文の構造と (42) の「よる」文の構造を大人の文法とし、2 節に幼児の言語獲得の観察事実に関する分析に基づき、次節では澄晴のアスペクトの意味と文法の獲得について考察する。

4. アスペクトの獲得：言語獲得理論研究への意義

2 節では、野地 (1973-1977) によって採集された瀬戸内方言話者の幼児 (澄晴) の言語獲得データに基づき、澄晴においては「ちゃった」であらわれる完了の表現は 2 歳 1 ヶ月前後に、「てる」文 (進行相と結果相いずれも) が 1 歳 11 ヶ月から 2 歳 0 ヶ月に、「とる」文 (進行相と結果相いずれも) が 2 歳 2 ヶ月前後に観察されることを指摘した。その上で他の統語獲得事実も考

慮にいれ、アスペクト表現の統語的特性、すなわち「て」の時制の素性とその具現化については、2 歳 2 ヶ月から 2 歳 3 ヶ月ごろに獲得されるとする分析を提案した。

2 節で見たように、澄晴には進行相と結果相をあらわす「ている」の代わりに過去形や現在形を用いる段階がある。(23) の例を再掲しよう。

- (23) a. 澄晴：トーチャン ココ ゴミツイタ ヨ。(2;1)
 b. 澄晴：タイタイ ガ アガッタ。(2;1)
 c. 澄晴：セージチャン オコレタ。
 母：セージチャン？ダレニ？
 澄晴：トーチャン ニ。マダ ナイタ。(2;2)
 d. 澄晴：ナク。ナク。(2;1)
 父：ダレガ ナイテルノ？

(23a-d) の例はすべて、「て (い) る」を用いるべき談話であると考えられる。しかし澄晴は、(23a-c) では過去形で、(23d) では現在形で進行相と結果相の意味を (産出において) あらわしている。

同様に、近未来の相について、大人の用法では現在形であらわされるべき文脈で、澄晴が過去形を用いている例、そしてその逆に過去の事柄を現在形であらわしている例も観察されている。(24) 及び (25) を再掲する。

- (24) 母：キョウワ アメガ フルカラ イカン ネ。
 澄晴：ギットン バッタン ヌレタ。(2;2)
 (25) 父：コンデタ？
 澄晴：コンデル。(2;2)

さらに、「とる」の誤用についても言及した。(31) を再掲する。

- (31) a. カーチャン ボク イマカラ ベベ チュクットル ヨ(2;4)
 b. イマ カラ ネ ポンガチ タベトル (2;4)

2節で述べたように、(31a-b)では近未来を表す現在形「作る」、「食べる」を用いるべきところを、澄晴は「ちゅくっとる(つくっとる)」、「食べとる」と発話している。

このように、時制に関する様々な間違いが観察されることから、アスペクト表現は、一見すると、1歳後半から2歳のはじめという早い時期から獲得されているように見えるものの、アスペクト表現の統語的特性と音声表現化それ自体を獲得するのは、結果相と進行相の「て(い)る」と「とる」文については、2歳2ヶ月から2歳3ヶ月ごろ、近未来や進行相の「よる」文は2歳4ヶ月ごろまで待たねばならないようである。

青野(2006)の「ている」文と「とる」文、「よる」文の理論的分析とA連鎖成熟仮説を仮定すると、繰り上げ構文の構造を持つ文の獲得時期が遅くなることが予測される。すなわち、繰り上げ構文、制御構文どちらかの構造を持つとされる「ている」文、「とる」文においても、「て」が[-tense]をもつ進行相はその獲得時期に遅れがみとめられることが予測される。しかしながら、2節に述べたように、澄晴の発話データから、この仮説を支持する実証的事実はみとめられない。A移動を伴う進行相の「ている」文や「とる」文も、A移動を伴わない結果相の「ている」文や「とる」文と同時期にあらわれ、そしてその時期はきわめて早期である。したがって、本稿で示す日本語の「て(い)る」、「よる」、「とる」といったアスペクト表現に関する分析は、A連鎖成熟仮説を支持しないものである。

実際に、A連鎖成熟仮説が日本語から支持されない可能性は、直接受身文の獲得からも裏付けられる。A移動を伴うとされている直接受身文も、澄晴のデータを詳細に検討すると、少なくとも2歳3ヶ月前後という早い段階で獲得されていることがわかる。

- (43) a. トーチャン ニ オコラレタン ヨ。(2;2)
 b. カ ニ カマエタ。(2;3)
 c. カーチャン ニ オコレタ。(2;5)

(43a), (43b) (音声的な「誤り」はあるが)いずれも正用である。2歳の段階で(43c)にみられるように「怒られた」であるべきところが「怒れた」としてあらわれたりもするなど、動詞の形態が誤ってあらわれている場合(「(r)-eru」の頭在化が獲得されていない例)も少なくない。しかし、少なくとも(43a-b)については、「に」という助詞が伴われており、文脈からも明らかに受身の意味で発話していることが認められる。したがって、これらは直接受身文の例であると考えることができる。

また、先に(23c)で見た例も思い出されたい。2歳1ヶ月前後に、進行相や結果相の意味をもつと考えられる文があらわれるが、それらが、過去形、あるいは現在形で音声化される場合も少なくない例として挙げたものである。(44)として再掲する。

- (44) a. トーチャン ココ ゴミツイタ ヨ。(2;1)
 b. タイタイ ガ アガッタ。(2;1)
 c. 澄晴: セージチャン オコレタ。
 母: セージチャン? ダレニ?
 澄晴: トーチャン ニ。マダ ナイタ。(2;2)
 d. 澄晴: ナク。ナク。(2;1)
 父: ダレガ ナイテルノ?

注目すべきは、(44c)の「おこられた」とすべきところを「おこれた」として発話されている例である。(43a)や(43c)のように、「れる」形態素の具体的な音声形式において誤用がみられるものの、意味とコンテキストから

は、これらは直接受身文の例と考えることもできる。もしこの例が直接受身の例であるとすれば、直接受身文は、形態的な獲得に遅れがみられるものの、進行相や結果相の「ている」とほぼ時期を同じくして観察されることになる。¹¹⁾

A連鎖成熟仮説によれば、直接受身文は間接受身文よりも獲得が遅れることが予測される。従って、澄晴が直接受身文を（間接受身文よりも早く）2歳3ヶ月前後では明確に発話しているという事実は、A連鎖成熟仮説が支持されないとする仮説にさらなる証拠を与えるものである。

また、TPの主要部T（「て」）に[+tense]と[-tense]の二種類があり、それが結果相と進行相の「ている」を分ける理由であるとする青野（2006）の分析に基づけば、澄晴の言語獲得の事実は、機能範疇であるT、Tのもつ二つの素性の違い、およびT範疇の投射についても2歳2ヶ月から2歳3ヶ月頃には獲得されていることを示すものである。本稿で述べた現在形、過去形が同じ形であられる時期があるという仮説は、TPの主要部Tが担う時制の素性が規定されておらず、同一の音声表現であられる段階があることを意味している。しかし、ここで示される実証的事実と分析は、機能範疇自体が幼児の文法に最初は欠如するという仮説を支持しない。欠如しているのは、素性別に異なる音声表示をもつ形式の具現化なのである。¹²⁾

11) Harada and Furuta (1999) は、実験と幼児の発話記録を用いて、間接受身文、及び所有受身文の獲得を実証的に調査している。澄晴の発話データをもとに、幼児の直接受身文が2歳1ヶ月であられるとしているが、間接受身文の初出は2歳7ヶ月であるとしている。

12) アスペクト表現の「ている」の獲得とは独立に、動詞の活用についての誤用がみられる。たとえば、澄晴は動詞の過去形「た」をしばしば「て」と発話する。2歳1ヶ月から2歳5ヶ月頃に、澄晴が過去形の「た」の代わりに誤って「て」と発話している例がいくつか見られる。

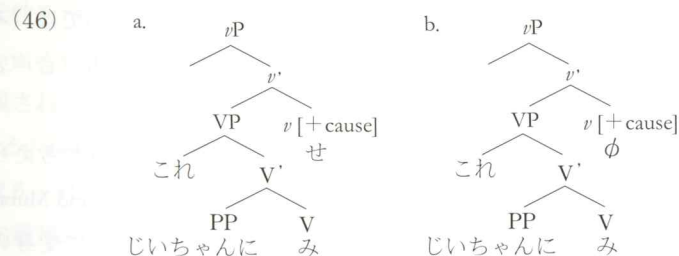
(ii) a. ボク ボール ナゲテ カーチャン ト。(2;1)
b. ワラッテ ヨ。(2;3)

(iii) は、澄晴が、父との散歩の帰りに、グラウンドで野球をしているのを見て、自分が母とボールを投げたことを父に言ったものである（野地 1973-1975 II P. 136）。文脈

この特徴は、Murasugi and Hashimoto (2004) の提案する VP-Shell の分析に基づく使役文、他動詞、自動詞の分析につながるものである。Murasugi and Hashimoto (2004) は、日本語を母語とする幼児において、(45) の自 / 他交替の間違いと (47) の使役の接辞の脱落が同時期に観察されることに注目し、それは幼児が、既得している *v*-VP 構造において、*v* が音声的に空として表現されると仮定する (*v* が音声としてあらわれないと仮定する) 獲得段階があるからであるとする仮説を提案している。

(45) コエ ジイチャンニ ミユ

(45) の文では、幼児が何かを祖父に見せようとしている場面であることから、「見せる」という二重目的語動詞が用いられるべきである。しかし、幼児は自動詞を「見ゆ」(=「見る」)と発話している。Murasugi and Hashimoto (2004) によると、(45) の文は大人の文法では (46a) のような構造を持つ。



(Murasugi and Hashimoto, 2004)

から過去であることは明らかであり、野地自身の記述にも「ボールを投げた（ナゲテ）と言う」とあるように、澄晴は「投げた」と言うべきところで「投げて」と発話している。(iib) は、澄晴が弟、照樹を「パー」と言ってあやし、照樹が笑ったことを母に伝えようとしたものである (Ibid. P. 356)。文脈から「笑ったよ」と過去形であられるのが適当であると判断されるが、澄晴の発話は「笑ってよ」と「て」を誤用しているものである。

しかし、幼児は、*v*が空である(46b)のような構造を仮定しているため、(45)のように発話すると提案している。同様の分析が(47)にも当てはまる。

(47) ママ アックン ノンデ

(47)の文は、母親に向かって幼児が自分に直接飲ませてほしいと頼んでいる文脈で発話されたものであり、語彙的使役文の例と判断されるものである。従って、大人の用法においては、使役動詞「飲ませて」でなくてはならないが、幼児は使役の接辞 *-ase* を落とし「飲んで」と発話している。Murasugi and Hashimoto (2004)によると、語彙的使役文における使役の接辞 *-(s)ase* は *v* に位置する。¹³⁾しかし、幼児は *v* を音声的に空として表現すると仮定しているため、(47)のように使役の接辞を落として発話すると考えられる。Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007)では、同様の間違いが澄晴データでも2歳1ヶ月から2歳6ヶ月において認められることを指摘し、Murasugi and Hashimoto (2004)の分析に更なる証拠を与えている。

以上の事実と分析は、日本語獲得の特徴として、*v*やTについては(その範疇は存在していても)それらの大人の文法における表記の仕方(音声表示の具現化)の獲得に時間がかかることを示している。

幼児が、機能範疇の主要部を音声的と空として表現していると考えられる例が、受身文、可能構文においても見られる。Fuji, Hashimoto and Murasugi (2007)は、幼児が、使役の接辞 *-(s)ase* 同様に、(48a)のように受身の接辞 *-(r)are* や、(48b)のように可能の接辞 *-(rar)e* を落として発話している例がみとめられることを報告している。

13) Murasugi and Hashimoto (2004)では、統語的使役文の接辞 *-(s)ase* はVに位置すると分析している。統語的使役文、語彙的使役文の分析及び構造はMurasugi and Hashimoto (2004)を参照されたい。

(48) a. ジュン: オニイチャン ニ タタイタ。(意図する発話: たたかれた) (4; 0)

(伊藤, 2005)

b. 母: ゼンプ タベラレルカラネ。

澄晴: ゼンプ タベル ネ。(意図する発話: 食べられる) (2; 1)

これらの例は、一つの音韻的語の中に複数の機能範疇の主要部があらわれうる膠着語において、使役、受身、可能表現といった接辞の音声化(機能範疇の具現化)を獲得するのに時間がかかることを示しているだろう。日本語の使役、受身、可能表現の獲得に時間がかかるとする報告は少なくない。しかし、実際は、*-(s)ase*, *-(r)are*, *-(rar)e* といった機能主要部の音声的具現化に時間を要するのであって、文法獲得自体が遅いのではないのではなからうか。幼児は、初期の段階で、*v*やTなどの機能範疇はそれらが音声的に具現化されないと仮定している。それらの素性がそれぞれ異なる音声表示で具現化されることを獲得する時間の存在こそが、複合述語文の獲得の中間段階である可能性を示唆するものである(Murasugi and Hashimoto, 2004; Murasugi, 2007a, b)。

残された問題は、「よる」が「とる」よりも遅く獲得されている点である。「よる」文は2歳4ヶ月で初出するものの、一定した頻度で発話されるのは2歳6ヶ月以降である。従って、「ている」文、「とる」文と比較すると「よる」文の獲得時期が遅いことは明らかである。

親のインプットに「よる」がほとんどないがために、幼児の「よる」の獲得が遅れる可能性が指摘されるかもしれない。しかしこの可能性はないだろう。「とる」もまた親のインプットにはほとんどない。にもかかわらず、「よる」と「とる」にはその獲得時期に差があるのである。

「よる」文はA移動を含む文であることから、「よる」文が他の文よりも遅く獲得されるという事実だけをみると、A連鎖成熟仮説は支持されるか

のように見える。しかし、A連鎖成熟仮説が正しいとすると、「よる」文と同様にA連鎖を伴うと考えられる進行相の「て(い)る」や「とる」文が、なぜ早期に獲得されるのかが説明できない。進行相をあらわす「て(い)る」文や「とる」文の獲得時期が早いことから、「よる」と「とる」の獲得時期の違いはA連鎖以外の要因にあると考えざるを得ない。これは直接受身形が早期に獲得される事実からも支持される。

親からのインプットの問題でもなく、A連鎖成熟に時間がかかることもない。では、なぜ「よる」は「とる」よりも遅く獲得されるのか。本稿では、この問題を解決する鍵は、「とる」の支配しうる意味の範囲が「よる」の支配しうる意味の範囲を一部抱合している点にある可能性を指摘したい。

愛媛方言(瀬戸内方言)では青野(2006)の判断によれば、「とる」文が進行相、結果相の両方の(広い)解釈を持ちうるのに対し、「よる」文は進行相(および「ている」や「とる」文には許されない近未来)の解釈しか持たない。「とる」文で表しえない近未来の解釈を除いては、「とる」文の方が「よる」文よりも取りうる意味の範囲が広いことから、幼児は当初、より「広い」意味をあらわしうる語彙を選択する可能性がある。この可能性は、「よる」文の産出頻度が2歳6ヶ月以降も「とる」文と比べてかなり低いことから支持される。

もしこの可能性が正しいとすれば、幼児のアスペクト表現の獲得は、より狭い意味を表す(部分集合となる)形式から、広い意味を表す形式へと移行するのではないことになる。むしろ、幼児は、より広い意味を表す形式から獲得し、狭い意味を表す形式のもつ「別の意味」(近未来)を知るとき、狭い意味を表す形式を獲得するといえる。澄晴の場合、より狭い形式を獲得するのは2歳4ヶ月頃であり、その時期に、近未来の表し方に誤用をしつつも、「よる」の進行相と近未来進行相の両方のアスペクト表現を獲得するのである。

また理論的分析上興味深いのは、VP補部をとる「よる」文のほうが、TP

補部をとる「とる」文よりも獲得が遅い点である。可能表現において、矢野(2007)は、VP補部をとる可能表現が早期に獲得されることを示している。もし、「よる」文の獲得が、補部の範疇の違いによるのであれば、矢野(2007)の結論と、本研究の結論は必ずしも一貫していないことになる。このことは、文法獲得の遅れの要因が、補部構造がVPかTPかといった点にはない可能性をも示唆するものかもしれない。

5. 結 論

本稿では、アスペクトをあらわす「ている」を含む述語文について、愛媛(瀬戸内)方言の「とる」文や「よる」文を比較の対象に含めて、その文法特性と言語獲得について理論的実証的研究を行った。本稿では、青野(2006)自身の方言(愛媛(瀬戸内)方言)から「ている」文の理論的分析に基づき、瀬戸内方言話者(広島在住)の幼児、澄晴の縦断的観察記録(野地, 1973-1977)を題材として、機能範疇であるT(て)の投射と素性の形態的具現化の獲得、ならびにA移動に関わる文法特性の獲得について考察した。

「ている」文については、進行相と結果相の二つの異なる解釈があることが知られている。竹沢(1991)、三原(1997)等は、それらが構造的相違によるものであると分析しているのに対し、青野(2006)では、それら二つの「ている」は、同一の構造を持ち、かつ、進行相と結果相の意味を区別するのは「て」の素性であることを提案している。「て」が[+tense]の素性をもつときには、制御構文、「て」が[-tense]の素性をもつときには繰り上げ構文、という二つの構造が導き出され、[+tense]の場合には結果相の解釈が、[-tense]の場合には進行相の解釈が可能となる。

本稿ではこの青野(2006)の分析に従い、「ている」の二つの意味解釈を「よる」と「とる」という異なる音声表示で表す瀬戸内方言話者である澄晴の発話データを詳細に分析した。その結果、澄晴のアスペクト表現及び動詞は以

下の順序で自然発話にあらわれることを報告した。

- (49) a. 動詞過去形 (1; 9)¹⁴⁾
 b. 動詞現在形 / 「てる」(進行相・結果相) (1; 11)
 c. 「ちゃった」(完了) / 「ている」(進行相・結果相) (2; 1)
 d. 「とる」(進行相) / 「とる」(結果相) (2; 2)
 e. 「よる」(進行相) (2; 4)

「てる」は1歳11ヶ月、「ちゃった」及び「て(い)る」(完了)アスペクトは2歳1ヶ月というかなり早い時期に観察され、「とる」は2歳2ヶ月、「よる」は2歳4ヶ月に自然発話において観察される。

しかし、本稿は、他の動詞の獲得やそれぞれのアスペクト表現の獲得にみられる諸特徴を詳細に検討することにより、「て(い)る」と「とる」についてもアスペクト表現の統語的特性(「て」の特性)そのものは、2歳2ヶ月から2歳3ヶ月まで待たねばならないとする分析を提案した。

2節では「て(い)る」文、「とる」文において、2歳2ヶ月から3ヶ月という進行相が結果相と同じ時期に獲得されることに注目し、コンテキストから「て」が[-tense]素性を持つことが明らかである事例を論じている。「て」が[-tense]素性を持つ場合には、A移動(繰り上げ(raising))が伴うとする青野(2006)の分析を仮定し、A連鎖成熟仮説が正しいとすると、「て」が[-tense]素性を持つもの、つまり進行相の「て(い)る」、「とる」文は獲得が遅くなると予想される。しかし、澄晴の獲得データを詳細に検討した結果、A移動を伴わない「て(い)る」文や「とる」文とA移動を伴う「て(い)る」文や「とる」文が同時に獲得されていることから、本稿ではA連鎖成

14) この段階は、動詞が単一の形態的形式でしか表されないと示しており、すべての動詞が必ずしも過去形の形式から獲得されるということはないことを付記する。澄晴の傾向としては、動詞過去形の形式で過去も現在もあわす場合が多い。

熟仮説は澄晴の発話データからは支持されないと結論づけた。アスペクト表現の統語的特性が獲得されていると判断される時期は(両親の発話には「とる」文、「よる」文の発話がほとんど見られないにも関わらず)澄晴が「よる」「とる」を産出する2歳3ヶ月の時期とも重なる。これは幼児の言語獲得とは親の言語形式の単なる模倣によるものではないことをも示唆するものである。

同幼児の発話において、直接受身文についても、アスペクト表現とほぼ同時期の2歳2ヶ月から2歳3ヶ月という(間接受身文よりも)早期にみとめられるとすれば、A連鎖成熟仮説が支持されない可能性のあることを指摘した。この結論は、成熟仮説が日本語のような言語には当てはまらないことのみを示すのではない。1節で触れたように、イヌイット語などの polysynthetic な言語では、語形成に主要部移動が適用され、動詞の受動形も主要部移動によって生産的に形成される。このような言語においては、受動態が早く獲得されることが指摘されている(Demuth, 1989; Allen and Crago, 1996 など)。こういった言語における早期のA連鎖の獲得に関する事実は、英語、ヘブライ語の獲得とは異なる特徴を示す可能性がある。これらの膠着言語における獲得諸相の違いは、異なる統語的主要部が、多数、生産的に(音韻的な)語の内部にあらわれうる膠着言語とそうではない言語の特徴に還元される可能性を示唆するものといえよう(Murasugi, 2007 a, b)。

また、青野(2006)の分析を仮定すると、澄晴の言語獲得データは、機能範疇であるTに関する素性の音声的具現化についても2歳2ヶ月から2歳3ヶ月といった早期に獲得されていることを示すものである。

さらに、澄晴のデータを分析する限りにおいて、「て(い)る」文や「とる」文と比べ、「よる」文の獲得が遅れる事実を指摘し、「よる」文は、2歳4ヶ月に獲得されるものの当初は音声表現化において誤用がみられることを報告した。「よる」文が遅く獲得される原因としては、進行相と結果相両方の解釈を持つ「とる」文の方が、進行相の解釈のみを持つ「よる」文よりも取り

うる意味の範囲が広い(無標である)ことに起因するとする分析を提案した。

以上、本稿では、愛媛出身の青野(2006)の「ている」文および「とる」文と「よる」文の理論的分析に基づき、同じく愛媛出身の野地(1973-1977)による(広島で育つ)澄晴の言語獲得に関する実証的研究とを詳細に検討した。ここに論じた愛媛(瀬戸内)方言のアスペクト表現に関する統語分析と言語獲得の実証的事実は、言語獲得研究における二つの大きな仮説—親の強化による言語習得の仮説、A連鎖成熟の仮説—のいずれをもが支持される論拠のない可能性を示唆するものである。

また、本稿は Murasugi and Hashimoto (2004) ならびに Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007) によって提案された動詞及び使役文の獲得に関する μ VP frame 仮説を、アスペクトをあらわす「ている」文の大人の文法と幼児の言語獲得の両面から支持するものである。T(ense) の獲得において時間を要するものは範疇そのものの獲得ではなく、その音声的具現化であるとする「機能主要部の空具現化仮説」(Null Realization of the Functional Head Hypothesis)は、Radford (1990) の小節仮説に反するものといえる。機能主要部の空具現化仮説 (Null Realization of the Functional Head Hypothesis) は、使役文、受身文、可能構文など、日本語の複合述語文の獲得途上に存在する中間段階を統一的に捉えうる。大人とは異なる音声表示で機能範疇を具現化する言語獲得における中間段階の存在は、複数の機能範疇がひとつの音韻的語を構成する、膠着語の言語獲得の特徴といえるのではなかろうか。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、斎藤衛氏、青野ますみ氏(愛媛方言話者)、藤井友比呂氏(長崎方言話者)、有元将剛氏、瀧田健介氏から貴重なコメントをいただいた。本稿は、2006年度ならびに2007年度南山大学パッヘ研究奨励金 I-A-2 ならびに科学研究費補助金基盤研究(C)〔「現代言語学理論における有標性：言語理論と言語獲得からのアプローチ」日本学術振興会〕により援助を受けている。

ここに記して、深く感謝する。

参考文献

- 青野ますみ(2006)「アスペクト「ている」の進行相・結果相解釈とその統一分析」修士論文、南山大学。
- 伊藤典子(2005)「シンとジュンの言語獲得」Ms., 南山大学。
- 奥田靖雄(1985)『ことばの研究・序説』, むぎ書房, 東京。
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63。
- 金田一春彦(1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」『日本語動詞のアスペクト』, 27-62, むぎ書房, 東京。
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房, 東京。
- 小出祐子(1995)「日本語の受動態の獲得」卒業論文, 金城学院大学。
- 沢木幹栄(2002)「方言研究の歴史」江端義夫(編)『朝倉日本語講座 10 方言』, 238-257, 朝倉書店, 東京。
- 齊木美知世(2002)「受動文の性質とその獲得について」筑波大学現代言語学研究会(編)『次世代の言語研究 1』, 41-85。
- 竹沢幸一(1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』, くろしお出版, 東京。
- 東条操(1995)「我国の方言区画」徳川宗賢(編)『東条操著作集 第一巻 私の方言学』, 1-8, ゆまに書房, 東京。
- 野地潤家(1973-1977)『幼児の言語生活の実態 I-IV』, 文化評論出版, 東京。
- 日高水穂(2002)「日本方言の音韻」江端義夫(編)『朝倉日本語講座 10 方言』, 68-82, 朝倉書店, 東京。
- 三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」中右実(編)『ヴォイスとアスペクト』, 研究社, 東京。
- 矢野敬子(2007)「複合述語文の構造と獲得:可能構文を中心として」修士論文, 南山大学。
- Allen, Shanley and Martha Crago (1996) "Early Acquisition of Passive in Inuktituk," *Journal of Child Language*, 23, 129-155.
- Borer, Hagit and Kenneth Wexler (1987) "The Maturation of Syntax," *Parameter Setting*,

- ed. by Thomas Roeper and Edwin Williams, 123–172, Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Crain, Stephen, Rosalind Thornton, and Keiko Murasugi (1987) "Capturing Evasive Passives," presented at the 12th Annual Boston University Conference on Child Language Development. Boston, MA.
- Demuth, Katherine (1989) "Acquisition of Sesotho Passive," *Language* 65, 56–80.
- Eisenbeiss, Sonja (1994) "Auxiliaries and the Acquisition of the Passive in German," *Proceedings of the 25th Stanford Child Language Research Forum*, ed. by Eve Clark. Stanford: CSLI, 235–242.
- Fuji, Chisato, Tomoko Hashimoto and Keiko Murasugi (2007) "Intermediate Stages in Acquisition of the Potential Construction," Paper presented at Connecticut-Nanzan Joint Workshop on Minimalist Syntax. Nanzan University, June 24, 2007.
- Harada, Kazuko I. and Tomoko Furuta (1999) "On the Maturation of Λ -chains: A View from Japanese Passives," *Grant-in-aid for COE research report (3)* (Kanda University of International Studies), 397–426.
- Lasnik, Howard (2000) "Derivation and Representation in Modern Transformational Syntax," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chris Collins, 62–88, Blackwell, Oxford.
- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, Lawrence Erlbaum, Mahwah, NJ.
- Martin, Roger (2001) "Null Case and the Distribution of PRO," *Linguistic Inquiry* 32, 141–166.
- Minai, Utako (2000) "The Acquisition of Japanese Passives," *Japanese/Korean Linguistics* 9, ed. by Mineharu Nakayama and Charles J. Quinn, 339–350, Quinn, CSLI, Stanford.
- Murasugi, Keiko (2007a) "Intermediate Acquisition Stages: A View from Japanese," Paper presented at University of Siena, May 5, 2007.
- Murasugi, Keiko (2007b) "Intermediate Stages in Language Acquisition: Prism in an Agglutinative Language," Paper presented at 3rd Acquisition Research Workshop, Center for Linguistics. Nanzan University, June 16, 2007.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) "Three Pieces of Acquisition Evidence for the μ -VP Frame," *Nanzan Linguistics*, 1, 1–19.
- Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto and Chisato Fuji (2007) "VP-Shell Analysis for the

- Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives," *Linguistics* 43, 615–652.
- Nishigauchi, Taisuke (1993) "Long Distance Passive," *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 79–114, Kuroshio, Tokyo.
- Oda, Tomoyo (2001) "Acquisition of Imperative 'Te' form in children's Early Japanese," 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第31号, 227–287.
- Ogihara, Toshiyuki (1998) "The Ambiguity of the -TE-IRU- Form in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 7, 87–120.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax: The Nature of Early Child Grammars of English*, Basil Blackwell, Oxford.
- Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi (1998) "Control in Complex Predicates," *Tsukuba Daigaku Tozai Gengo Bunka no Ruikeiron Tokubetsu Purajekuto Kenkyu Hokokusho, Heisei 10 Nendo II, Bessatsu*, 15–46.
- Sano, Tetsuya (2000) "Issues on Unaccusatives and Passives in the Acquisition of Japanese," *Proceedings of Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 1, 1–21. Hituzi Syobo, Tokyo.
- Sugisaki, Koji (1999) "Japanese Passives in Acquisition," *UCONN Working Papers in Linguistics* 10: 145–156.
- Urushibara, Saeko (2004) "Verb Classes and Aspectual Interpretation: English and Two Dialects of Japanese," Ms., The Tenth Morphology and Lexicon Forum. Tokyo University.
- Washio, Ryuichi (1993) "When Causatives Mean Passive: A Cross-linguistic Perspective," *Journal of East Asian Linguistics* 2, 45–90.